

富士川游先生との巡り会い

田中助一

私は小学生の時から地理や歴史が好きであった。大正十五年山口県立萩中学校三年生の時、地歴担任の香川政一先生から、私の生まれた郷土史を書くことをすすめられた。

昭和五年四月、日本大学専門部医学科に入学し、昭和七年三月の春休みに帰省して萩中学校構内にあった山口県立萩図書館に行ったところ、香川先生が退職後同館の司書をして居られた。先生は私が医科に進学したことを喜んで下さり、いろいろ話をされたが、「防長には軍人や政治家のことを書いた本は多くあるが、医学や科学のことを書いたものが無いので、君は将来その方面のことを研究して見てはどうか」とすすめられ、四、五人の医家先哲のことを話された。そして「東京には『日本医学史』という立派な本を書かれた富士川游博士が居られるので、話を聞かれるとよい」と言われた。そこで私は早速『列伝体防長史』と言う小冊子を借りて読んだ。新学期になって上京し、新聞広告で富士川博士が東拓ビル四階の中山文化研究所の所長であることを知ったので、紹介状も持たず往訪した。しかし博士は気さくに御引見下さり、綴糸が切れてバラバラになっている『日本医学史』をめくられながら、三、四人の防長医家先哲のことを話して下さり、「毎月会を開いているから、都合が良かったらおいでなさい。」とおっしゃり、それから毎月通知が来るようになり、そのまま自然に入会して今日に至っている。今日私が医学史の研究を続けているのは、富士川博士という不世出の良師に巡り会ったからである。

卒業記念に座右の銘をお願いしたら、先生が非常に尊敬して居られた前野良沢の言葉と、「菜根譚」の一節を書いて下

さった。

昭和十五年に『青木周弼伝』の原稿が出来たので、校閲をお願いしたが御発病のため残念ながら見ていただけなかった。

(日本医史学会評議員)



子長

富士川游博士自画像